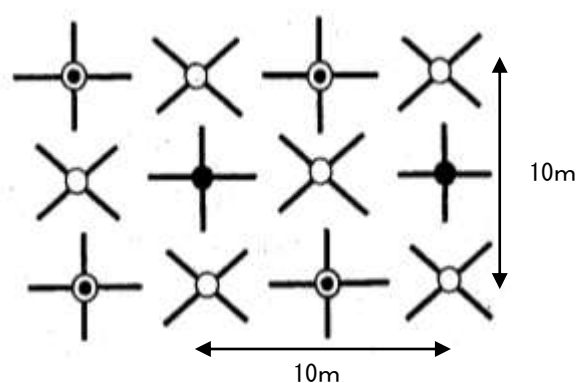


1. 南水整枝剪定のポイント

✿ 間伐・縮伐

5m×5m植え（又は 4m×4m）では、8 年目以降、主枝等の交差が多くなるので、縮伐・間伐を計画的に実施する必要がある。間伐が遅れると、混み合いから、主枝先端部分が弱り、樹冠拡大が遅れる。

8 年目を目安に 1 次間伐の縮伐を開始し、10～11 年程度を目安に、1 次間伐を終了させる。



◎永久樹：主枝亜主枝を確立し、目標樹形に仕上げる。

●2 次間伐樹：骨格の形成と結実を両立させる。

○1 次間伐樹：結実を優先した整枝・剪定とする。

上図：計画密植での主枝の配置

- ☆ 間伐にあたっては、遠い位置まで落ち着いた花芽をつけるために、骨格枝として亜主枝を育成することが必要となる。成木では、4 本主枝を基本とし、各主枝に 2 本ずつ計 8 本の主枝を配置することが基本である。亜主枝の位置付けができていないか、主幹に対して太すぎる枝（特に樹冠内部）がないか、確認する。



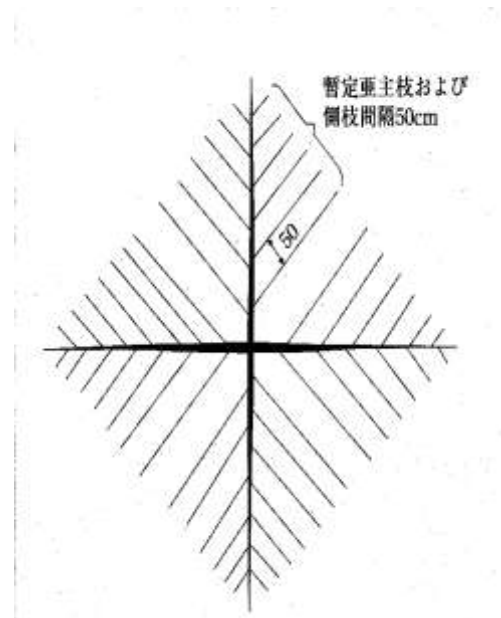
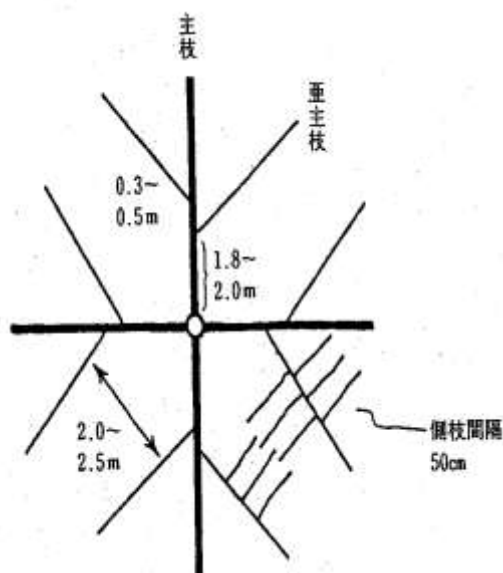
✿ 亜主枝の育成

① 現在発生している若い枝から良い位置のものを選び、養成する。

- 主幹部から 1.8m 程度に第一亜主枝、その 50～60cm 先に第二亜主枝
- 亜主枝間隔は、2m 以上空ける。

② 将来、側枝（結果枝）を多く配置するための枝である。側枝の候補となる横部からの新梢が発生しやすいよう誘導する。

- 枝の樹勢を強化する。 → 先端部を強化し、枝全体の着果負担も減らす。
- 切り口部分（潜芽の発生部分）を確保する。 → 短果枝群をある程度基部から整理（切除）する。



2. 芽すぐり（花芽整理）の目的

結実が不安定な品種（品目）は、開花前までに有る程度芽すぐり（花芽整理）を実施しておく必要がある。そうすることで、開花時の受粉能力を最大限に高めることができる。

特に南水等は、結実が毎年不安定で、どうしても芽数を確保しておきたくところであるが、逆に芽数が多すぎると、開花時に貯蔵養分の競合がおき、結果として結実不良のなるパターンが多い。芽数を思い切って制限することは勇気のいる作業であるが、花の能力を最大限に高め、結実安定を図るため、整枝剪定と並行して積極的に実施したい。

✿ 芽すぐり（花芽整理）のポイント

- ① 1短果枝当り1～2芽を残す。主枝・垂主枝に片側15cm間隔で、横向きか斜め下向きの短果枝群を残し、上芽と下芽は基本的に切除すること。
- ② ショウガ芽（短果枝群）を整理して貯蔵養分の消耗を防ぐ。通常はハサミで位置の悪い短果枝を中心に切除するが、葉枚数の確保を含めて、手で花芽を欠いてもよい。
- ③ 側枝の横向き（外側向き）の芽を2芽残す。上向きの短果枝は日焼け果になりやすいので切除すること。
- ④ 基の花芽に切り戻さず、果台を積み上げ、外に開いたように整理する（花芽の間隔が広くなり、受粉や袋掛けの作業が楽になる）
- ⑤ 横向き、斜め上向きなど欲しい方向（着果させたい方向）の花芽を残すことで、良質の花芽に養分を集中させ、幼果の肥大促進を図るために必要な管理。樹勢を保ち、肥大を促すことで、くぼみ果、条溝果の低減も期待できる。
- ⑥ 着果負担を減らして樹勢の維持、葉の増加も図ることができ、日焼けの防止にも役立てたい。



芽すぐりの例
斜め横向きまたは斜め上の芽を残すこと。

